



夢遊金華山の記

↑

重文  
洋学文庫  
文庫8  
A 22  
2







ちしき

大槻文庫

それよりこの門定をいふとて  
左のちしき  
其形或る者ある方や  
あまの多る年たのま  
何ともいふ  
よ  
他のあ  
ちしき







龍と十一面觀音の重峰と云ふんは地方八  
九回と云うる所をたゞしつゝしてと云ふ所  
杉敷株を遠くをまて山頂のまゝと  
綾をなすものならざるを知らぬ所の  
傍に密達塔をこゝに建てし所なり  
四面の眺を唯大洋をまて水沓沓と  
るまゝ天と合すらるる是天下東の極也  
ゆゑ魚しきく西北をあつるの諸島中  
同よと波きよのこゝをともけりともゆふ

網

芝をぬきつゝまをを体肉と稱す  
網代も波目なりまをたゞむむらむ  
又下りまをあけしははのまを  
海まもゆゆ成とり連貫してりれい  
金らなまこ太刀ありけ石縦横大  
大太刀もく形を考へし  
うま太刀うまをこれを探しもの  
いまややん怪やらん程を  
いふ水晶石より布名を旗鉾石と



彌子昔金山神こゝろのやまの社らとてつとていふは  
あつらんし各られを仰そをまこと唯臆を  
清くそとらなり形から稜城をうしてらる  
十と名廻りも十とむらと云昔に於て  
しが教神にまよふあれて其まよを摧くだき  
りあは怪むを識しべとてたしてまよを  
つらねてこそまよひし人々も十一抱か程  
あり満世界の内をな長大の水晶あり  
魚しとも見えたりあはれらるる并けあ

しとてんふ歳千茶の半をゆきものうや  
思くまむしはゆよとてつとを光を  
そやうらとて成熱視されはあはれ石英  
の小塊聚結してけ久塊を考ゆるもの  
なり其らうとてとらんぬはあはれ小塊乃  
まよふ浮ひて苔の掩りて所をうらるる  
水晶石の名虚しは凡水精石英  
の類大小の別なく自ら六稜と考ゆる  
造化自然の天工なりけ石水精の小



塊を結成して可なり長火の石柱を為す  
 も亦六稜をなせりされ本性自然の志  
 う〜〜も〜系造化の眞まふ測りな  
 るう〜ん平澤氏の遊記にけ石俗小  
 水晶石と呼做はもの何の體なるを  
 知しけしといふ未其理を辨つて  
 古來此山ありありとをいふも  
 銭市にて今け理を究めしといふも  
 前及末等者とやいふんなど







季子<sup>十二</sup>歳  
六二童寫

而たりたりはあつらぬくの如きもさるく  
 多しとてりもいりく岩水晶を念ふも  
 今一我念を専らふんとあつらぬこと  
 今け水晶石をとりて一子の教をいふ  
 一しあつらぬの巡り受けあつらぬと  
 幸偏と約しあつらぬ未と日の流るる程  
 あつらぬあつらぬ又とあつらぬあつらぬ  
 門をふむいふあつらぬあつらぬあつらぬ  
 あつらぬあつらぬ大造<sup>あつらぬ</sup>少とこのあつらぬ















あつち

大津の浦にあらはれしあまの石を  
さぐりありきまをらうれを大なるみこ  
いよさるめくさ浪をいよさるのち  
くさひらふたてんこさるのち  
又ありありなるらうれとあまの  
さるものよなるみこくさる板  
とちく浪の勢いとたてさる  
いよ浪のいよ入るらうれとあま  
さるみこ名をいよはらう昔けら

麻粒ありし時種討ちや一時よし  
さけてめ人の負まらうれと  
いよとくししんをらうれと  
船は獨銛水けと急松松のとも  
津も又海なるよあれと  
うれと川の大河ありてけ  
あまのよ信やう其の  
うけをらうなり地もあ  
ものうやあまのいよと



なりうも面白流のちあつてなむとの  
せごしこれより後まじひかゝるは  
そを石さくして全剛界胎藏界を  
名つくるまむまより名まじふ大匠に  
いへる先うさくさく石巖に沿ひ其  
罅隙とほく行そこれ法をまじふ石  
壁土こ面を圍く廣く十数丈の  
敷千尺道のころぬくまむして  
而は海に向つてその道ふりて流

まのを俾けちるのさしあへんはな風を如  
く此の怒濤まじひてはくはまむ  
千萬里よりあまむくまむく白ものも龍  
先を平つてまらとみえりて大風雷成勢  
うもあやむくまむを確壯をうもあ  
観なりとくまむくまむく心と飛魂消  
そらとまむくまむくねほゆ又左のまむ  
うもあむくまむく海の中よりまむく大石  
をたみあけくまむく高橋のまむくを



方面より一大巨石を載せ今よりさかたう  
高んをさうとぬせし我橋石と稱す其絶  
地よりとあぢきものなりしとていふあるよ  
なりては石も巨大とせり小径に於  
しうやと橋よりぬきとて時をたてて其成  
乃いふも亦もこの入道よりいぬれぬちよ  
ありてたゞ石をさしむることありしに  
さよありしとてとれ力比うんよりそ  
たらしもこのえくの勝と探んとなは

りつにちやそもあぢきんとしけれとも  
すくも奥をいせのち預も是れをい  
かやしはゆきしものなりぬともい  
くもしはししては奥をいししと  
絶ぬも亦もいぬれともいぬれとも  
とのしはしぬれともいぬれとも  
そやとさうりさよその時候も程遠  
うもぬれはらぬしとていぬれし  
とてありしとていぬれともいぬれとも



街へてけ立成りぬも——十道ふゆれ  
いさいの河原あみと坂らの神ははは  
弟をからしめ茶と酒を廻りてきまは  
ちりなるとせし其の道ふたはたこいふ  
しあをなるともなんぬ大道よりいふ中  
の捷徑ちゆうみちをとりにてしとてきまはぬるありと  
りつとてやりのきるをぬれぬも——大  
きもとせつなきとつと流れてさくきく  
とたどりぬよ無きつとてきまはぬる

あよあやとけものもえんつひに  
多く解のしりつとたなぬるも  
種——大木ともしききんぎょとて立た挿さぬるあり  
松杉しょうしん櫟れきのしりひも——いさやもみ  
そのの本なるふゆのきり又いとあり  
あしつと多あてんゆり——とてきまは  
ちあゆるるもなるといふ道の程ふたあり  
及の枝ねともなるものもあつとて  
いひ深山幽谷といひはるるありつと



いふからぬは行かざるなりおし  
つてはゆきかみたるも多しつら  
いぬくむくつてをたしつた  
のむつらうしとよらうしと  
石谷水の海をたつるも多し  
てあふらうあふらうと満  
たひ苔をあらうしと多し  
は時をたつるも多しとた  
むのりも多しとたつらう時

傷り木の根よりけし又い  
杖をたつるも多しとた  
きて山又山とたつらう  
むつとつらうとたつらう  
石をたつらうとたつらう  
とつらうとたつらうと  
煙をたつらうとたつらう  
藁をたつらうとたつらう  
えんたつらうとたつらう







そ〜あ〜きや〜とつきふ〜りた〜急よ  
そ〜うの〜き〜ら〜地〜い〜り火おも〜  
〜りな〜吹〜き〜し〜休らひ〜き〜し〜  
それの〜き〜と〜いひか〜し〜き〜ら〜き〜す  
食法も〜あ〜りん〜よ〜し〜あ〜ん〜と〜残〜ら  
揃り〜ら〜飯か〜し〜ら〜揃り〜ら〜腹  
〜し〜ら〜ひの〜し〜ら〜し〜よ〜た〜よ〜ぞ〜れ〜て〜と〜  
あ〜忘〜れ〜ら〜と〜て〜懐〜く〜つ〜け〜ら〜細〜意〜ち〜  
ほ〜つ〜た〜と〜りお〜して〜これ〜を〜ら〜ん〜と〜ら〜ら〜乃

ん〜し〜金らあ〜ら〜ふ〜ら〜な〜ら〜と〜あ〜ら〜い〜ら〜  
〜あ〜ら〜い〜ら〜飢〜つ〜つ〜ぬ〜ら〜ら〜れ〜ら〜ぬ〜ら〜は〜い〜ら〜  
〜年ねんの食くも〜改か膳ぜんの味あじの食くら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜  
あ〜ら〜し〜ら〜つ〜つ〜つ〜つ〜そのら〜地ちの〜し〜ら〜  
〜あ〜ら〜ら〜ら〜教しよら〜ら〜れ〜し〜ら〜ら〜ら〜あ〜ら〜ら〜ひ  
ら〜ひ〜ら〜ら〜ひ〜ら〜ら〜ら〜粒つぶは〜白しろき〜辛からき〜ら〜ら〜の  
〜ら〜ひ〜ら〜ん〜節せつの〜や〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ん〜と〜ら〜ら〜ら〜  
あ〜ら〜し〜そのら〜の〜地ち〜ら〜ら〜し〜ら〜ら〜ら〜の〜ら〜ら〜  
〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜



けなすものふ人くらゐかとえて又のち  
りちしつらな縁いそまゝ福をうきま  
ゆりまゐり成の別おまゝしと世を  
こゑしつらあゝし一念のあかぬ  
てしよ山幽谷のけしき園秋蔭又ちい  
の徑こまらまゝし事ゆゑくゆりしとま  
くしつらあゝしあゝれいそまゝに  
よゝをあゝし縁ひらけゆいしくは  
うれとらゝまをまゝくらのちあゝいゆあ

念をす嘸いさうしぬれたる枕をとくことをれま  
のこけねの日記とくまゝしと氣力  
まゝらゝまゝの心を遠しもの業  
しくも縁しくもれもあゝしそまゝのあま  
ろくあまていひぬまゝらゝは船とく起す  
船うれい持あやゆまふらゆら海を流  
ていつらまゝとくは

金まき山海といひのらちをぬはん  
あじろく流らちをぬはん















行かば申のまよもさるるころ渡波よまらやえ  
あすり行よ松の列樹の連らしなまらつ  
たに南洋の満るき風よまら魔心鬼心  
石巖識として甚く奇よ石の華表縦  
横一條の巨石をよ月を登るし湊所よ  
入海とりのまぬをぬよりなせしをよ海しよ  
と川とあ海る石色のまら系よしつらし  
別よまらししそ程をりたり百星せしげ  
ととし大夫氏 新田氏 良作 跟随せし

又と世とをりしと思ひしそつりし産生  
夢のまらりしのことく月をあらとてあ  
らり海をぬけしことまらまらまら  
まらまららつことまらまらまら  
まらまらまら

夢のまらまらまらまらまら  
まらまらまらまらまらまら











歷靜寬堂電覽

愆ト催レ使セ申

法ののりちるるる  
そろふしましまし不實而慄のいふり

in the ...

頃聞某君東遊航金華抵則日  
莫使其左右燃一大炬火以探  
其勝蹟去以余徵諸古人秉燭  
於花燃犀於水猶且乏厥人也  
而况於燃炬探勝耶可謂奇也  
世有何元朗續之世說之尾予  
壯其遊賦半律以贈  
聞君尋勝海東隅航抵金華叱石  
徒燃炬名山窺玉室驪龍窟底



似探珠シツクニシ

此二首の詩も  
源氏のまじり

源五城

くさくさもつるく  
くさくさもつるく

此巻、王父磐水府君が文化九年壬申

金華山ニ遊ビ自記セシモノナリ其公命ヲ

同テ使カガリシヲムラエテ夢ニ蛇ニシテ池也且

名ヲ置キ今其事歴ヲ失シトテ此レテ此

筆ス

明治丁丑春

孫文彦記



Handwritten notes on a small slip of paper at the top right, including the number '4' and some illegible characters.

似探珠ニニニ

源五城

Main body of handwritten Japanese text in cursive style, consisting of approximately 15 vertical columns. The text is partially obscured by red circular ink seals.







既記

壬申季秋陪

盤水先生游金華山

勢若大軍來自東

砢崖高浪爭雌雄

天光晴泛扶桑外

風色秋深孤嶋中

龍女樓臺臨碧海

羽人宮觀逼蒼空

山邊都有黃金氣

佛樹杪兼看落照紅

宿渡波

江村秋月拂風霜

時有歸鴻天際翔

寫得爽舒數行字

無端遊子淚沾衣

登魔鬼山

牧山一望鴻蒼煙

此友  
金名  
同  
華



此長  
金名  
同  
名  
筆

砒崖高浪爭雌雄  
天光晴泛扶桑外  
風色秋深孤島中  
龍女樓臺臨碧海  
羽人宮觀逼蒼空  
山邊都有黃金氣  
佛<sup>樹</sup>杪兼看落照紅

宿渡波

江村秋月拂風霜  
時有歸鴻天際翔  
寫得爽舒數行字  
無端遊子淚沾衣

登魔鬼山

牧山一望鴻蒼煙  
帆影遙中若解船  
兩岸人家雲外濕  
漁歌縹渺夕陽天

古詩改

影田隆德  
愚稿



